



コオニユリ



オニユリ



珠芽(むかご)

今月は、五節句の一つの「七夕」があります。起源には諸説ありますが、日本古来の「棚機女(たなばたつめ)」伝説と、古代中国から伝わった「牽牛(けんぎゅう)・織女(しゆくじよ)」の神話が合わさって、今のような風習が定着したようです。

この時期、時々見かける花に「オニユリ(鬼百合)」と「コオニユリ(小鬼百合)」があります。どちらもユリ科ユリ属の多年草で、簡単な見分け方は、葉の付け根に黒紫色の珠芽(むかご)が付くのがオニユリで、付かないのがコオニユリ。オニユリはムカゴから開花まで3年程度、コオニユリは実生から開花まで6〜8年くらいかかります。

花の大きさはオニユリが直径11cm前後、コオニユリが7cm前後です。花被片(かひへん)は強く反り返り、花色はどちらも橙赤色で濃い色の斑点があり、花粉は黒紫色をしています。

きれいな花を咲かせるのに「鬼百合」という名前が付いていますが、背が高くて花色や斑点から赤鬼を連想させることや、他の百合のイメージと異なり、庭に植えても丈夫に育つことなどに由来していると言われています。

ちなみに「百合」は、百枚ほどの鱗片葉(りんぺんよう)が重なり合って鱗茎(りんけい)を作る様子から付けられたとされています。百合の鱗茎はいわゆる「百合根(ゆりね)」で、食用のほとんどがコオニユリの栽培品ですが、オニユリとコオニユリの雑種の説もあります。

町中で元気に咲くオニユリとコオニユリを楽しみながら、夏の散歩をお続けください。